

文芸

俳句

柿熟れて村のあちこち熊騒ぐ 池田 逸子
地下足袋の老の身軽し鳥渡る 伊藤 敬子
年毎に荃石重くなりにつけり 今関満喜子
笑ふしかすべなし冬の介護かな 魚地 照子
老ひとり守る田畑や冬近し 江森 悦子
一眼のお薄の香り文化祭 大谷 武彦
空魚籠に釣瓶落し陽の透けし 川島 孝夫
小夜時雨寝息ふし妻の居て 川島 通則
白秋の銀座ハ丁石置 向後 寛
児と遊ぶ小春の一日子に帰る 越川 せつ子
根分けやし菊に時雨の恵かな 越川 福子
むくどりの時を探すミイティング 小松 藤男
繫がれし山羊の親子や花芒 佐瀬 輝夫
しぐれ空より返し拭く眼鏡かな 宍倉 道子
一村をうすく包みて時雨来る 鈴木とし子

短歌

しぐるるや山頭火にはなりきれず 鈴木 利子
茎漬けの樽をはみ出し押されけり 玉虫 栗扇
時雨去り竿のしずくの光をり 土屋美枝子
大粒の星の煙めき時雨止む 土屋 義昭
日和得て山茶花垣を通りぬけ 戸村 静華
ローカル線見送るホーム初時雨 西崎さち子
困憂ふ談義にぎやか冬に入る 早川 勇
こぼれるる金木犀の花を踏み 郵便受けの朝刊を取る 鈴木まさ子
たはむれに保育園児とこつんこ 加減知らねばひとく痛かり 田崎 尚美
川の面に夕つ日映りさざ波の きらめく見つつ速歩してあつ 池田 春江
自家用の葉物とぼしき秋となり 葦・明日葉に助けられあつ 青木 秀子
暴風雨やに静まる校庭を 諸手をあげて児らの駆けゆく 大場 和可
吾が年も忘るる程に長く生き 娘らが祝ひてくるる誕生日 吉岡 信子

夕暮れに親しき友と立ち話 明日もまたねと別れ来にけり 平山 芳子
終電の到着待つ間を掃除する ローカル線の若き駅員 島田ますみ
「暑かった」夏も去りゆき今は秋 九十九里に寄る波を見てあつ 押尾 輝子
お遍路の結願の寺の土産なる 生姜くず湯を姑といいたる 西山満里子
芝草の上を飛びゆく蛱蝶 なくしたる物捜しあるがに 八角 三枝
ちぎり絵を思はす桜の花びらが 貯水池の面に浮かびるにけり 芹川 初子
夫君を長く看取りし友の手を 握り締めあつ通夜なる席に 齊藤つね子
.....
千し竿にうたかたのいのち立しるる 青き蟬鳴じつと動かざり 高梨 キヨ
熟れ柿を暫し濡らして初時雨 彼方の山に消えてゆきたり 土屋 好
いたわりの甘い一言涙する 老いの徴候独りわびしむ 伊藤 定男
私の背に米六十kgを担ぎたる 昔の話孫に信ぜず 越川 義則
健やかに楽しく暮す毎日を 感謝の心で共に過さむ 鈴木 益郎

こうほう博物館

33

子どもが作った縄文土器？

今から二十五年ほど前に発掘調査された東長山野遺跡からは、膨大な量の縄文土器が出土しました。同遺跡は今から五千〜四千年前の縄文時代中期に栄えた集落遺跡で、全体の半分しか発掘しませんでした。居住跡が五十軒ほどと、二百基以上の貯蔵穴が検出され、多くの人が住んでいたことがわかりました。その多くの人々が作り、使った縄文土器は食べ物を入れておいたり、煮たりするものが多く、大きなものは高さ一メートルあるものから、小さいものは十センチに満たないものまでありました。今回はその中で、小さい土器を取り上げてみました。



▶出土した縄文土器、小さな土器は子どもが作ったものでしょうか？

のような小さな土器は、出土した膨大な量の土器から比べるとごく僅かで、実用のために作ったとは思えません。思うにこれらの小さな土器は、縄文人の子供たちが親から教わって、初めて作った土器で、それを自分たちのおもちゃとして遊んだものかもしれません。縄文人も初めから立派な土器を作れたわけではなく、子供の頃からこうして土器を作り、次第に覚えて見事な土器を作れるようになったと思います。そう思いながらこんな小さな土器を見るといとおしくなります。